

教宣 せぶん

注目の大一番

「私たちの社員制度はなぜ廃止されるのか？」

支社長や支店長、ビデオレターに登場する社長から、その「説明」は何度も繰り返されました。団交報告の会社発言やレターにもその「説明」は掲載されていました。企業論理と言うこの一方の側の説明だけを聞いていれば、「なるほど」「仕方ない」「あきらめるしかないか」と思ったかもしれません。実際にこういった思考で、転進したRAの仲間は多かったはずで

その会社の「説明」に対して、働くものの視点に立つ法の専門家が挑んでくれます。私たちに代わって、私たちが率直に感じる疑問をぶつけてくれます。「企業論理」という得体の知れないシロモノを解体してくれます。その審問に対し、会社側証人がどう答えるのか、非常に興味深いものがあります。企業内で、私たちが同じ質問をしたとしても、納得できないと主張しても、最終的には「経営」という大きな力の前に私たちの声や主張は跳ね返されてしまいます。事実、そういう団交を積み重ねて私たちは今日を迎えています。しかし、20日の法廷では、企業内での「経営」という圧倒的な力は発揮できません。まったく対等な立場で私たちと向き合わなければなりません。ちょうど100メートル走を競うのに、いつも自転車という文明の利器を使用していた一方が、今回の勝負ではその自転車を使わず、初めて「足」と「足」で100メートル走を勝負するといった感じでしょうか。そして、裁判官という法の番人が、法に照らし合わせながら、客観的な目で、この「やりとり」を見つめてくれています。スポーツマンシップに則ってこの「勝負」を正確にジャッジしてくれる審判がいるわけです。

こういうシチュエーションになった時に、会社の説明してきた「企業論理」がどれだけ「万能」なものなのか、ようやくその真価がわかります。神秘のベールがはがされるわけです。原告団だけではなく、不本意にも会社を辞めざるを得なかった多くのRAの仲間にもぜひこのシーンを見てもらいたいと思いますし、損保に働く多くの仲間にも見てもらいたいと思います。さらに言えば「自転車に乗って100メートルを走れない」というアドバンテージがないシチュエーションをつくられるからこそ、会社は全損保を忌み嫌うのではないのでしょうか。「足」と「足」の正味の勝負をさせられるからこそ、組合の分裂は起こったのではないのでしょうか。全損保脱退のルーツ、分裂のルーツまでもが、この100メートル走の中に隠されているとしたら、私たちにとってこの100メートル走はまさに世紀の大勝負と言えます。やっとたどり着いたこの大一番を、特等席で見ることが出来る「幸せ」を感じます。